



丸 華
1,600円

現代語で読む新島襄

『現代語で読む新島襄』編集委員会編

新島襄の精神を知るには新島自身が書き残した和文・英文の文章と直接取り組むのが一番よい。ところが新島の日本語は幕末から明治二十三年にかけての日本語であり、今の学生生徒諸君にとって、理解しがたい日本語である。このジレンマを解決するために井上勝也(大学文学部教授)、伊藤彌彦(大学文学部教授)、本井康博(大学文学部嘱託講師)、沖田行司(大学文学部教授)、坂本清音(女子大学学芸学部特任教授)の五氏が協力して『現代語で読む新島襄』を刊行した。本書は二十一世紀の同志社人たちへの何よりの贈り物である。

編集委員たちは『新島襄全集』

全十巻の中から新島の代表的な手記、演説、説教、日記、手紙を選ぶという困難な作業を見事にこなした。

新島の候文の手紙を現代語に訳す場合には、彼自身の使った単語や表現に引きずられる誘惑に立ち向かわねばならない。本書では読者の理解を助けるために、必要な注を挿入したり、「補訳」ともいえるべき訳し方が試みられている。

本書の重要な特色は(1)厳密に書かれた順(編年体)による編纂がなされていること、(2)合計四十八の「コラム」を挿入することにより新島のいろんな面に光をあてる努力がなされていること、(3)巻末に「新島襄関連事典」とも呼ぶうる注がおかれ、随時参照できるようにしたこと、(4)適切な写真、図版がちりばめられていること等である。私は本書の出現を双手を挙げて歓迎するものである。

北垣宗治(敬和学園大学長)



北大路書房
2,400円

オーブニングアップ

―秘密の告白と心身の健康―

J・W・ペネベーカー著

余語真夫(大学文学部助教授) 監訳

人間は心に様々な過去の傷(トラウマ)を持っている。そしてトラウマのために心身の健康を損なう人が多くいる。臨床心理学では、クライエントのトラウマをどのようにとらえ、どのように癒していくかを中心に多くの心理療法が考案されている。この本の著者であるペネベーカー教授は社会心理学が専門であるが、その研究はトラウマを自分自身で記述し表現することと人間が健康になるということとを明らかにし、さらにトラウマを表現すると社会的適応も良くなり、ポジティブな生き方に向かっていくことができるという

うことを示している。現在多くの人が健康を意識してフィットネスクラブに通ったり、健康食品を使ったりしているが、現代は心の時代といわれながら、今までこのような方法によって自分自身の心を健康に向けていくという考えは少なかった。この本が多く人の現代人の心の健康を維持するために役立つことを確信する次第である。

またこの本は余語真夫先生が監訳者となつて、日本で出版されたのであるが、彼はペネベーカー教授のもとに留学し、現在共同研究をしているのであるからまことに適役である。この本はトラウマという古くて新しいテーマに斬新な視点からの示唆を多く与えてくれる本であり、専門家にも一般の人にも役立つ本であると言える。

佐藤 豪(大学文学部助教授)



三館
1,300円

聖教新聞の読み方

―創価学会・機関紙のエネルギー源を探る―

渡辺武達（大学文学部教授） 編著

日本で、読売新聞、朝日新聞に次ぐ五五〇万部を発行する第三の巨大新聞が『聖教新聞』である。また、創価学会―公明党の影響力は、その是非にかかわらず政治的に無視できないものである。それにもかかわらず、『聖教新聞』のメディア研究はこれまでほとんど存在しなかった。恥ずかしながら、私もいまだ同紙を手にとったことがない。

こうした存在と認識のギャップは、メディア研究にとつてのみならず、日本社会の情報環境の改革にとって大きな盲点ではないか。本書の分析を貫く、そうした編著者の立場は説得力が

ある。昭和天皇崩御報道における天皇観のゆらぎ、大石寺や脱会者に対する「過激表現」など、『聖教新聞』への違和感も率直に指摘しつつ、その成功理由を前向きに評価している著者の姿勢は共感できる。実際、一般紙との紙面構成の比較や内容分析から、意外な事実が数多く指摘されており、一氣に読み通してしまった。

宅配員へのヒアリング調査まで含む機関紙論（第一部）が質量ともに中心だが、さらに第二部「創価学会をめぐる日本のメディア事情」、第三部「聖教新聞を読み解くための資料集」が付けられており、創価学会研究入門として便利である。資料編は同志社大学文学部新聞学専攻のゼミ生や院生との共同作業であり、更に次回作として『日本共産党機関紙（しんぶん赤旗）の読み方』が準備されていると聞いている。今から待ち遠しい。

佐藤卓己（大学文学部助教授）



学生社
3,200円

旧石器考古学辞典

旧石器文化談話会編

松藤和人（大学文学部助教授）

編集代表

旧石器時代は、考古学の中でも最も難解な用語が用いられている時代の一つと考えられている。その原因の一つには、関連科学との結びつきの強さがあげられる。そのため、他の時代では見られない専門用語が多 dụngされることも少なくない。

また、旧石器時代の用語は、フランスなどの西洋諸国で研究が早くから進展したため、用語を日本語に翻訳したり、外来語としてのカタカナ表記も多い。それに加え日本の旧石器文化に適合する日本独自の用語も多く存在している。

これらの理由によって、旧石

器時代を対象とする論文や、調査報告書を読む場合には、読者に一定レベル以上の基礎知識の蓄積が必要とされる。そのため、簡便に専門用語の解説、その由来などを調べることでできる辞典が各方面から切望されていた。本書は、実務に携わる若手研究者を中心に執筆された日本初の旧石器時代専門の辞典である。本文には遺跡・石器・技術・学説・理論・化石人類・分析法・年代測定法・地質・地形・火山灰・岩石・哺乳動物・古生態・学者（故人）にわたる七六五項目が図を交えて解説されている。巻末には、遺跡地図・地質関連の図表・旧石器時代の展示が充実した博物館一覧などが付録として掲載されている。

本書は、旧石器時代の研究をはじめる学生、旧石器時代に興味を持つ市民、行政発掘に携わる人々にとって必携の書物といえる。

中川和哉（東京都府理蔵文化財調査研究センター調査員）



吉川弘文館
8,000円

平安貴族と邸第

臈谷 寿 安 大学現代社会学部教授 著

臈谷氏は、ある意味で、平安時代及び平安京研究の成果を一般に普及させた学者として有名なだったのであるまいか。その土台に精緻な研究の裏付けがあったことは申すまでもなく、本書が取り扱う平安京における貴族邸宅研究の分野でも、角田文衛博士とともに『角川日本地名大辞典』26京都府下巻（角川書店、昭和五十七年）の「平安京」を執筆し、加納重文・高橋康夫両氏とともに『平安京の邸第』（望稜舎、昭和六十二年）を編集するなどの研究活動により、学界を先導して来られたのである。その学問的営為を一書にまとめる時間的余裕が氏になかったことは残念なことであった。

本書は、第一部に藤原道長の土御門殿や藤原頼通の高陽院・高倉殿などの摂関期の邸第、第二部に村上源氏の諸邸、後白河上皇の院御所法住寺殿、建春門院の最勝光院などの院政期の邸第、第三部には平安京とその周辺についての定評ある論文を収めている。単に平安貴族の諸邸第に関する個別研究を集成するのではなく、文献史学と考古学の両面から政治上の重要人物の邸宅を研究するのだ、という著者の平安京研究の立場が表明されているといえよう。

著者は平安京の諸邸第についての著書をいずれの日にか公刊したいと「あとがき」で述べられている。それも学界において極めて有意義なことであるが、著者の平安時代史研究の集大成を待ち望んでいる研究者も多いのである。後進の者として、このことをあわせてお願いしたいと思う。

古藤真平（古代学研究所講師）



有斐閣
3,500円

講座21世紀の労働法 第3巻 労働条件の決定と変更

日本労働法学会編集
安枝英紳（大学法学部教授）

ほか執筆

本書は、日本労働法学会創立五十周年を記念し、労働法全般にわたる論点の整理、検証をまとめたこの度刊行された講座全八巻のうちの一書である。学会員の英知が結集された本講座は、タイトル通り、まさに新世紀に向けて発信された労働法学会の成果の結晶といえる。この一大プロジェクトでは、戦後の労働法制の変化を精査し、ふさわしい労働法理論と法制度のあり方を再考察することによって、新世紀への展望を切り開くこととする意気込みを感じ取ることができる。

わが労働法制は旧世紀からその変容を迫られつつも、いまだ不完全のままついには新世紀に突入した。産業構造の変化、企業活動のグローバル化、少子高齢化、雇用・就労形態の多様化、労働組合の組織率の低下などあらゆる外的要因が混迷する労働法制のしかるべき着陸地点の模索を引き続き宿題として課している。「労働条件の決定と変更」をテーマに掲げる本書は、これら労働法制の変容を迫る外的要因に深く関連する労働条件の決定と変更について、現代的課題を網羅し、これらに多角的側面からアプローチする。加えて、外国法の動向を踏まえ、現代情勢における伝統的システムの欠点を見極めた上で、新たな環境にふさわしい労働条件決定・変更のシステムを模索している。二十一世紀の労働法制の課題と展望を理解し、検討するうえでまさしく必携の書である。

川井圭司（関西外国語大学専任講師）



慶應義塾大学出版会
6,000円

南極条約体制と国際法―領土、資源、環境をめぐる利害の調整― 池島大策

(女子大学現代社会学部助教) 著

二十世紀初頭アムンゼンとスコットの極点到達競争の舞台となった南極大陸は、今日では各国の平和的な科学調査・開発活動の場となっている。こうした活動やそれに伴う請求を国際的に規制する中核となるのが、一九五九年に締結(発効は同六一年)された南極条約であり、本書は同条約に基づく体制を領域、資源、環境等の諸側面から検討した、わが国最初の総合的な研究書であって、著者の博士論文を発展させた力作である。

著者は本書でまず、英仏などの領有権請求紛争が国際地球観

測年を契機として、南極条約の成立に至った経緯を跡づけ、ついで同条約の基本原則(領有権紛争の凍結、平和的利用、科学調査の自由と国際協力)を明らかにする。さらに著者は、特定の条約当事国で構成された南極条約協議国会議が、そのメンバーを拡大し活動を透明化するなかで、生物・鉱物資源の保全から環境保護に至る広い分野で成果を挙げてきたことを評価する。そのうえで著者は南極条約体制の直面する課題として、南極に「人類の共同の財産」概念などを適用する試みや条約の非当事国に対する同体制の対抗力について分析を加えている。

巻頭の南極大陸図は、巻末の詳細な人名・事項索引や豊富な参考文献リストと相俟って、読者の理解を助けようとする著者の苦心と、本書のテーマに対する著者の真摯な態度を裏書きするものである。

安藤仁介(大学法学部教授)



八千代出版
2,900円

グローバル経済のゆくえ

嶋田 巧(大学商学部助教) 編著

現代の世界経済の動きを一言で表せばグローバル化の急速な進展といえるだろう。その全体像を的確に把握することは決して容易ではないが、本書はこの課題に真正面から取り組んだ力作で、五氏による共著の形をとって嶋田巧氏が全体の編集を担当されている。構成は、I. IMF体制と世界経済、II. GATT/WTO体制と世界経済、III. グローバル化のなかのアジア経済、IV. グローバリゼーションと世界経済の四部から成り、巻末に初心者向けの用語解説がつけられている。

第二次大戦後の資本主義世界の枠組はふつうIMF・GATT

T体制とよばれているが、本書はその下での国際通貨体制、国際貿易の秩序と政策、アジア経済の発展などの切り口から世界経済の現状について多面的に考察され、さらにそのなかでヨーロッパの地域統合や統一通貨(ユーロ)の誕生、アジアの通貨危機の原因とそれへの対応策、グローバリゼーションと地域的経済統合との関連などが丹念に検討され、説得力に富む議論が展開されている。あえて欲をいえば国際労働力移動(移民)や世界経済における国家やNGOの役割、環境問題などについて、さらなる論及が望まれる。現在の世界経済はグローバル化と地域統合、自由化と管理強化など矛盾する傾向が並存し、大きな転換期に直面しているが、本書は編集も配慮が行き届いており、世界経済の全体像を浮き彫りにした実り多い研究成果といえるだろう。

藤村幸雄(大学経済学部教授)



あなたの会社の偏差 値診断

松本敏史 大学商学部助教授 共著

平成不況による会社倒産の激増を反映してか、書店には経営分析・倒産予測に関連する書物が多く並べられている。しかし、これらの書物で紹介されている経営分析手法はいずれも、会計や経営に関する専門的知識を必要とし、使いこなすには時間がかかる。また、それらの分析手法は会社の経営状態の絶対評価ではなく、他の会社との相対評価にすぎない。

本書はこのような従来の経営分析手法の欠点を克服した画期的な分析手法を開発した。著者は会社の倒産が表面化するまでには会社の体力が徐々に低下していくということに着目し、会

社の総合的な体力を判定することができ、「企業力指数」という分析手法を考案したのである。この企業力指数は会社の決算書から容易に計算することができ、その数値によって会社の絶対企業力を強靱・剛健・健康・虚弱・病弱・危篤と判定することができる。会社の企業力を人間の健康状態にたとえているところもおもしろい。この企業力指数は論理的整合性と統計的検証から編み出されたものであるがゆえに、その的中率は高い。ちなみに、昨年話題となった「さこう」は97年2月時点ですでに「危篤」と判定されている。

添付のCD-ROMを使えば、数値を入力するだけで簡単に企業力の判定ができる。このように会社の経営状態を誰にでも容易に、かつ的確に絶対評価できる経営分析手法を考案した本書の意義は大きい。

志賀 理 (大学商学部助教授)



飛鳥新社
2,200円

ヒトラーの呪縛

佐藤卓己 (大学文学部助教授) 編

今の我々の日常生活の中で、「ナチ」は様々な場面で登場する。戦争マンガ、ヒトラー小説、ナチ関係映画、ロック、オカルト、文学、インターネット……。こういった本書でいうところのナチ・カルチャーⅡ「ナチカル」が人々をひきつける不思議な魅力をも、少しでも解き明かそうというのが、ここでのテーマである。これまで歴史研究者の多くは、ナチⅡ「絶対悪」と封印してしまい、ナチの不思議な魅力を正面から分析の対象としてこなかった。だが、それでは、少なくとも国内だけでも万単位

ると考えられる「ナチおたく」ないしは、「ナチを「かつこいい」と感じるもつと多くの大衆のことが全くわからないのではないか、というのが佐藤氏らの苛立ちである。ここで、これまでの佐藤氏の問題意識と接合する。つまり「大衆」である。二十世紀は「大衆の時代」である、ないしは、であった。その大衆の獲得をめぐる血みどろの闘争が日夜繰り広げられているのに、その大衆の分析がこれまで蔑ろにされてきたのではないかと、いうのである。せいぜい数十人にしか読まれないような研究論文に必死になっている「良識ある」研究に飽き足らない佐藤氏の「挑戦」といつてもいい。そう言われてみると、たしかに、果たして「おたく」は、「ナチおたく」かドイツイ史研究者のどちらの方なのか、と考えさせられる。

星乃治彦 (熊本県立大学助教授)



相川書房
2,000円

ボランティア いきいきと生きる―

渡辺武男（大学文学部教授）監修

本書ではボランティア活動を単に福祉や医療、環境などの分野に働きかける活動だけでなく、地域社会を変革し、新しいコミュニティ形成の重要なモメントとして位置付けている。そしてその活動は健全な社会への批判力として、また民主的社会を創造する基盤としてとらえ、新しい生活文化の創造であると説く。その意味で本書は極めて思索的であり、奥行きのある内容を備えている。

本書においては、ボランティア活動は、その本質的に重要な要素としては自由意志に基づく個々人の自発的な取り組みであるという基本姿勢を堅持する。

その意味ではその活動は義務としてではなく、むしろ権利であるという。この主張は先ごろの教育改革国民会議で論議された政治主導の奉仕活動義務化に対するアンチテーゼであり、重要な視点である。

また障害のある人が活動の「受け手」としてではなく、自らもボランティア活動の「主体者」となりうるのが具体的に述べられていることも重要である。

このことは決してボランティア活動が一部の健康者の活動ではなく、ノーマライゼーションの流れの中で、すべての人に開かれた市民社会での共同の営みであることを意味している。

これはまさにボランティア活動が「新しい創造に満ちた社会の構築に寄与しうることを共有しあうこと」（監修者）であり、新世紀の市民社会を構想する上で一読に値する有益な提言である。

野村武夫（京都ノートルダム女子大学教授）



神戸学生青年
センター出版部
2,190円

日韓の歴史教科書を読み直す―新しい相互理解を求めて―

キリスト教学校教育同盟

関西地区国際交流委員会編

沖田行司（大学文学部教授）・

工藤弘志（大学キリスト教文化セン

ター助教授）ほか執筆

本書は、同志社が法人全体として加盟しているキリスト教学校教育同盟の関西地区国際交流委員会によって出版されたものである。これに本学の沖田行司教授と工藤弘志助教授、そして佐野安仁名誉教授（現徳島文理大学）が非常な貢献をされた。日本とアジアの関係史について、とりわけ学校教育の現場における歴史教科書については、例えばすでに『アジアの教科書に書かれた日本の戦争』（越田隆編・梨の木舎）など、いくつか

の書物が出版されているが、本書の特徴は、とくに日韓キリスト教学校の交流のなかからこの企画が生まれ、両国のキリスト教学校に関わる研究者が共同討議を繰り返し十年の歳月をへて、日韓両国で出版されたところにある。

近年、日本で台頭しているいわゆる「自由主義史観」による論調、あるいは昨年の国旗国歌法案や教育基本法の改正への動きなどに見られる急激な変化の中で、「政治における憎しみと経済における利害を超えた、キリスト教における謙虚と寛容と愛の精神を共通の思想」（沖田教授、本書一七九頁）を求めて作業が進められた意義は大きい。そして日韓双方において「キリスト教人道主義」（沖田教授、一八九頁）を大切にすキリスト教学校が、その責任と使命を負っていることを改めて認識させられる。

原 誠（大学神学部教授）



学文社
2,300円

生涯学習の展開

国生 寿 (大学文学部教授)

ほか編著

二十一世紀は現代の情報化がさらに進み、それにグローバル化、高齢化が加わり、真の生涯学習社会になると言われている。生涯学習社会とは、人びとが生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が社会で適切に評価される社会のことであり、そのような社会を形成していくことが現代の課題である。

大学文学部教授の国生寿ほか編著『生涯学習の展開』は、そのような生涯学習社会を理論

的、制度的、政策的に論じたその領域では数少ない労作の一つである。

本書は、一章…生涯学習の理念と意義、二章…生涯学習の行政と体制、三章…学習者と社会教育の内容・方法、四章…社会教育の施設、五章…社会教育の指導者、六章…現代社会と生涯学習の六章構成となっている。

最近、民間教育産業の導入などで生涯学習にとって必須である社会教育の必要性が喪失したとする「社会教育終焉論」が盛んであるが、本書はその論の虚構性を証明し、男女共同参画社会の形成なども含め、生涯学習における社会教育行政の重要性を指摘している。本書はまた経済界でも高く評価され、日経連の『経営者ダイジェスト』(no.九六八)の中でも紹介されている。

大城善盛(大学文学部教授)

近江商人

末永國紀 (大学経済学部教授) 著



中公新書
740円

「近江泥棒・伊勢乞食」江戸時代、江戸の町でゆるぎない商権を築き上げた近江と伊勢の商人はこう揶揄された。近江商人の商魂を示すこの言葉は、一般大衆の嗜好に合うよう味付けされた小説やテレビドラマを通して、今では広く人々の間に浸透してしまった感さえる。本書は、そうした近江商人に対する偏見を見事に払拭してくれる。著者は言う、近江商人こそわが国のビジネスマンの草分けであり、現代日本の経済と経営のあり方を先取る機能と普遍性をもっていった。その特性を端的に示す言葉が広域志向性である。近江以外に進出して出店を

開き、出先の地域の人々との共生に気を配った近江商人は、その経営方法に適した商法の採用・資金調達・人材育成・経営管理・旅と情報の組織化等に独自の工夫をなし、それらは相互に密接な繋がりをもって行われたという。終章では、始末・勤勉・創意工夫し、積善を心がけ、堅実で正当な商をモットーとした近江商人の精神についても論じられている。幕末維新をはじめとする歴史の荒波は、運や熱意だけで乗り切れるものではない。長年蓄積された経営手法とともに、困難や苦境に屈せず、新たな局面を切り開く精神力、心の涵養も不可欠であった。そこにも現在の我々が学ぶべき点は少なくない。本書は、日本の経営が培ってきた独自性の中の普遍性を、ダイナミックな商人の歴史とともに、確かな検証の裏付けと研究の蓄積を土台に語られた好著である。

植田知子(滋賀県AKINDO委員会)



ちくろしお出版
3,800円

言語研究における機能主義―誌上討論会―

小泉 保編・龍城正明（大学文学部教授）ほか論述

第二次世界大戦後の哲学思想の流れは、構造主義、生成主義（新構造主義）、それに機能主義に三分されよう。言語学も大きな意味での哲学の一分野と考えれば、この三つの流れに沿って発展してきた。

機能主義は構造主義、生成主義の中間の立場をとり、客観的構造重視とともに、主観的思考の入る余地も残した。

本書は言語学における機能主義を概観し、現在におけるその実態を紹介しつつ、将来への展望をも与えようとする機能言語学の入門解説書である。第一部では「機能主義言語学の諸相」

と称して五つの論文をのせ、第二部では異色の誌上討論会を特集し、第三部では小泉保氏の解説をのせる。論文はすべて出色の出来ぶり、新進気鋭の若手学者のそれぞれの得意の分野での研究、分析が紹介されている。

中でも評者の感銘したのは、龍城正明氏の「テーマ・レーマの解釈とスーパーレーマ・プラーグ言語学派から選択体系機能言語学」なる論文で、著者は、機能言語学の中核的概念であるテーマ・レーマについて、古典的伝統文法より、プラーグ学派の諸説、ロンドン・スクール（ハリディイ等）の説を紹介し、自己の発案による「スーパーレーマ」説を開陳している。日本語と英語の文構造を対照分析した点にも独創性が見られる。

著者のさらなる研鑽によってこの説が発展し、完成することを念じたい。

石黒昭博（大学文学部教授）



世界思想社
2,300円

シェイクスピアを学ぶ人のために

今西雅章ほか編

坂本完春（大学文学部教授）・勝山貴之・山口賀史（大学文学部助教授）ほか執筆

学術書の場合、読む人をして作品を読みたいとか研究したいと思わせるような書物にすることは至難の技である。論文集になっても入門書にはなりにくいというのが普通であろう。しかしこの書はその両方の性格を備えている。シェイクスピア研究を志す人には高度の専門性を提供すると同時に、シェイクスピアの面白さをじっくり味わいたいという人のための配慮もなされ、まさに「学ぶ人のための良書」と言えよう。

内容は総論と作品論に分かれる。読者は総論で、シェイクス

ピアの生涯と作品を概観し、時代思想、当時の演劇技法や約束事、日本の古典演劇との比較についての講釈を受けて準備を整えてから、各論へと導かれる。各論はさらに「中心と周縁」、「外面と内面」、「はじめと終わり」と題する三部に分けられ、合計七作品がそれぞれ複数の執筆者により論じられるが、その切り口、視点、準拠する資料などの多様性が刺激的であり、いつのまにかシェイクスピア批評史も垣間見ることになる。

末尾の文献案内は、勝山氏と本学英文学専攻の大学院生である山本圭子氏とによって作成されたものであるが、作品の日本語訳、日本語で書かれた研究書と入門書（翻訳を含む）や、英語の原文で接したい人のためには注釈付きの全集・双書とシェイクスピア関係の辞典などが丹念に集められている。各論末尾の参考文献リストの中には注釈付きのものもあり、重宝する。

塩尻恭子（大学文学部教授）